



2008年4月発行

故郷の言葉で

「さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰ってきた、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話しているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。『話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。・・・彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。』」（使徒言行録2章5~11節）

ユダヤ人は古くから、戦争に破れ、その度に捕虜として、遠い外国に移されると言う、悲しいし歴史を繰り返して来ましたから、本国以上に外国に住むユダヤ人が沢山いました。ディアスポラのユダヤ人、と呼ばれる人々です。しかし、彼らの中でも、特に信心深い人々は、最後はユダヤ、特に神殿の建つエルサレムで死を迎えたいと、世界各地から晩年になってエルサレムに移り住みました。五旬祭の日、使徒たちの上に聖霊が降ったとき、この物音を聞きつけ、真っ先に駆けつけてきたのは、彼らでした。勿論彼らだけではなく、その中には、五旬祭を祝うために、この日世界の各地からエルサレムにやって来ていた人たちも、大勢混じっていたことでしょう。

彼らは、聖霊を受けた使徒たちが、懐かしい自分たちの生まれ故郷の言葉で話しているのを聞いて、皆あっけにとられたと言います。ガリラヤ出身の使徒たちの日常語はアラム語でした。当時の世界共通語・ギリシャ語を、多少話せる者もいたかも知れませんが、あらゆる他国の言葉を話せる者などいる訳がありません。ところが、その時集まった者たちは、使徒たちから、夫々異なった自分たちの生まれ故郷の言葉で、神の偉大な業について話されるのを聞いた、と言うのですから驚きです。一体これはどう理解したらよいのでしょうか。

或る人は、使徒たちは異言を語ったのだ、と言います。しかし、異言は解釈者がいなく

れば意味不明の言葉で、とても懐かしい言葉などにはなりようがありません。だからパウロも、「わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一萬の言葉を語るよりも、理性によって五つの言葉を語る方をとります」（1コリント14：19）、と言いました。

五旬祭の日起こった現象が、どのようなものであったのか、聖書に書いてある以上のことは、何も分かりません。しかし確かなことは、五旬祭の日、聖霊に満たされた使徒たちは福音を語り、神の偉大な業を宣べ伝え、これを聞いた者たちは、出身地を異にしていたにもかかわらず、誰もが、それぞれに懐かしい故郷の言葉を聞くように、これを聞いた、と言うことです。これは一体何を意味しているのでしょうか。

福音とは、世界の人々、全人類にとって、正に故郷の言葉だ、と言うことではないでしょうか。神は、全人類を、御自身の被造物としてお造りになったのです。自覚しようと、自覚しまいと、人は皆、「神の中に生き、動き、存在しているのです」（使徒17：28）。或は、「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向っているのです」（ローマ11：36）。誰にとっても、神のみ許は、究極の故郷なのです。福音とは、神の許を離れ去った人間に対する、神からの招きの言葉、「もう一度私の許に帰って来なさい」、と言う、神の愛の呼び掛けなのです。

アウグスティヌスは、有名な告白録の中で、「私たちは、神に向って造られた者なのだから、神の懐に憩うまでは、真の平安を得ない」、と述べています。神のみ許こそ、私たちすべての者の故郷であり、その故郷に、私たちすべての者を招き返そうと、神は、御子イエス・キリストをこの世に送り、十字架と復活を通して、人間の罪を償い、罪の報いである死を滅ぼして、天の故郷への道を備えてくださいました。これこそが神の偉大な業、福音なのです。

牧師 三輪恭嗣

（2008年2月3日主日礼拝説教より）